

戦争の
事実を後世に
伝えたい



資料収集 コンサルタント
羽島知之さん
(1960年経済学卒)

出征、学徒出陣、防空、疎開……。戦争を体験した事がない私達にとって、それらがどういうものであるか、何い知ることのできる貴重な本だ。圧巻なのは、掲載されている資料約300点を、著者の羽島さんが1人で集めたこと。「朝4時に起きて骨重市に出かけることもありました」という羽島さんの戦時資料コレクションは全体では3千点にも及ぶという。

この本の特徴は、ただの資料集で終わっていない点だ。戦時下のキワードごとに資料を掲載し、それに対するコラムがあり、さらには巻末に年表、用語集、索引などがついているので、戦争当時の世相を、誰でもわかりやすく理解できる。

さらに巻頭では、羽島さんの中学時代の恩師であり、国語教育の草分け的存在として98歳の今も精力的に活動されている大村はま先生のインタビューも掲載されている。戦争当時を教師として過ごした世代は少なくなっているだけに、どんな思いで教え子と接していたのか、学校全体で戦争に向かわなければならぬ当時の気持ちとはどんなものだったのか知る事ができる貴重なインタビューになっている。

このような膨大な資料を集め、3年半という長い時間をかけて編集し



「資料が語る戦時下の暮らし」
麻布プロデュース 3,360円

たのは、戦争の事実を後世に伝えなければらたという羽島さんの強い思いがきっかけだった。「21世紀に入っても、ニューヨーク同時テロに対するアフガンへの報復戦争や、イラク戦争などが続きました。日本も自衛隊が人道支援などの目的でイラク入りしましたが、これが原因で戦争に巻き込まれてしまいかも知れない。もうすぐ戦後60年を迎え、戦争を知らない世代が大半を占めるようになっていくでしょう。そんな時こそ、戦争が一般国民をどのように巻き込んでいったのか、戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の大切さを伝えなければならぬと思いました。」

昨年まで本学の理事を務めた羽島さんの夢は、大学内に博物館をつくること。「東洋大学の歴史だけでなく、例えば哲学の歴史などなんらかのポリシーを持って、学外へアピールできる博物館が理想ですね」。

あ の 人 こ の 人 S T U D E N T

働きながら学ぶ学生と社会のパイプ役に



2部学生ネットワーク
代表 本橋誠司さん
(第2部法律学科3年)

私たちの将来に直接影響する様々な社会問題が顕在化している今日、政治に関心が持たその動向を監視する重要性はますます高まっています。しかし投票率は年々低下、特に20代政治離れは著しい。その無投票数は400万票にのぼるといわれ、政党の議席数、つまり政策の流れを変革させる力を持つ。

こうした現状に危機感を抱いた全国約40大学の2部学生で構成される「全国2部学生ネットワーク」のメンバーが7月の参院選直前、加入大学の約1800名を対象に、自衛隊イラク派遣の賛否などのアンケートを実施、その結果を主要5政党に送り意見を求めた。全政党から回答が届け、その結果を各大学のキャンパスで配布した。

首都圏や関西を中心に約200名のメンバーからなるこのネットワークの代表を務めるのは本橋誠司さん。「大学生の半分は有権者。働きながら学ぶ学生に政治意識を問いかけ、政党からの回答を伝え返すことで、選挙への関心を呼び起こしたい」と動機を説明する。

ネットワークの立ち上げは3年前、全国の大学で相次いで2部が廃止されたことが発端だ。当初は廃止反対運動が中心だったが、働きながら学ぶ2部学生が社会とのパイプ役になれるのでは、と政治や環境問題などに取り組み始めた。

「大学全人といわれる時代、2部のあり方は大きな転換期。働きながら学ぶ意欲を持つ人々のために、2部を残させた。そのためには2部学生自身がその存在を社会に示せる人材でなければならぬと思うのです」と自らの使命を語った。

平日は財団法人に勤務し、週末は親戚が経営する会社の営業をこなす。2つの仕事・学業、サークル、そしてネットワークの代表と繁忙を極める日々だ。

今では珍しい6人兄弟の次男。「あとに続く4人の弟妹の進路を考えると2部進学を選択しました」と柔らかに語る彼の笑顔に接したとき、日々のパワーは家族に対する深い愛情に拠るものなのだと実感した。